

「手紙」

プロミュージシャンを目指していた私はせっせとレコード会社にデモテープ（当時はまさにカセットテープ）を送っておりまして。しかし、返事すら来ず、「どうせ俺なんて」と少し拗ねていた私は何を思ったかアメリカのアトランティック・レコードにデモテープを送ってみました。アトランティックレコードと言えば当時はレッド・ツェッペリンやディープ・パープルなどのロックバンドを擁する、世界一のレコード会社でした。LPには会社の住所が書かれていました。数か月後、忘れた頃に返事が着ました。「弊社はデモテープを受け付けていません。しかし検討いただいたことに感謝いたします。今後のご健闘をお祈りします」というようなお断りの手紙。しかし嬉しかったです。一流の会社はこうやって返事をくれるんだ！ スゴイぞ！ ちゃんと書いて送ればちゃんと返事が来るのか。私は驕りに乗って、国内のレコード会社に片っ端からデモテープを送り、その後CBS/SONYと契約することになります。

冤罪犠牲者の会にはたくさんのお手紙が着ます。返事を書くとき「あちこち手紙を送ったけれど、返事をもらったのは初めてです」と書いてあります。恐らく他の団体は私たちの会より規模が大きいので、手紙を開封して読むまでに時間がかかっているのかもしれませんが。今、私は獄中からの手紙に返事を書いています。暗い独居房で、あるいは雑然とした雑居房でちゃぶ台の様な小さな机で手紙を書いている場面を想像します。祈るような気持ちでアトランティックレコードに手紙を書いた日のことを思い出します。無視なんてできるはずがありません。葉にもすがれる気持ちで一生懸命書いてくれた手紙です。一生懸命、返事を書きます。

このデジタル全盛の時代に、手書きの手紙に詰め込まれた気持ちはダイレクトに響いてきます。私は何もやってないんです！ 行き場のない気持ちを痛いほど感じます。直ぐに解決できる簡単な問題は1つありません。まずは、しっかりと向き合って会話をするところからスタートです。これからも、一通一通を大事にする気持ちは忘れないようにしたいと思っています。ちなみにアトランティックから届いた返事は無鉄砲だった自分を忘れないために、ダメ元で諦めずにチャレンジする気持ちを忘れないために、今でも大切に保管しています。（事務局／なつし税）

日野町事件は、事件発生から40年、

父が逮捕されて37年が過ぎようとしています。

「父ちゃん殴られても蹴られても自分がやったとは言わなかった。そやけど娘の嫁ぎ先へ行って家の中ガタガタにしてやろうかと言われた時には我慢が出来なかった。父ちゃん何もやってない。誰が信用してくれんでもお前らだけは信用してくれ」とあの明るい父が泣きながら訴えた夜を私は決して忘れません。

今年こそは再審開始が決定することを望んでおります、どうかご支援よろしくお願いいたします。（日野町事件／飯原弘次）

冤罪犠牲者の会結成6周年、おめでとうございます。

「冤罪犠牲者を作らせない法律と再審のルールを作る」。当時、夫は、「冤罪犠牲者が長い歳月をかけてやっと雪冤を果たしても、この国では誰一人責任もとらず、反省も謝罪もしない。これでは冤罪事件が何件解決しようと、犠牲者は増え続ける。冤罪体験者自らが声を出して、みんなで『法整備』の必要性を訴えて行くんだ、と言っていました。

この間、袴田事件「死刑再審で58年目の無罪判決」を機に全国的で取組まれた「再審法改正、今こそ！」の機運の高まりに、私は「やっとここまで来た！」の思いでした。「再審法改正超党派議員連立」の加盟議員が、全議員の過半数を超えたという報告に『議員立法で可決』も夢じゃない、とも思いました。ところが、土壇場での自公維離脱。全政党一致の法案提出が叶わず、野党6党による提出となりましたが、法案は継続審議となり、希望は繋がりませんでした。「国会頑張れ！」の声、行動が力になったと思います。

法案成立をたくさんの「仲間」が切望しています。何としても国会主導で可決に持ち込めるよう、引き続き当事者の声を届けて行きましょう。

（茨城県 冤罪「市川事件」桜井昌司妻 桜井恵子）